

## 特集趣旨

川 端 美 季

(立命館大学衣笠総合研究機構)

大 谷 いづみ

(立命館大学産業社会学部／生存学研究所)

本特集は、2021 年 11 月 20 日に開催したオンライン企画「情報保障のいまとこれから——生存学研究所の取り組み」をもとに各報告を改稿、編集したものである。この企画の主催は立命館大学生存学研究所で、立命館大学「Post コロナ社会 提案公募研究プログラム—Visionaries for the New Normal—」に採択された「困りごとを抱えた学生と教員を架橋するプラットフォームの構築：Post コロナ社会における高等教育のハイブリッド化による「障害学生」支援の未来」共催で行われた。

企画内容は次のように案内された。

生存学研究所がこれまでやってきたオンライン企画や障害学国際セミナー、土曜講座などの情報保障の取り組みについて、オンライン事務局メンバーの報告、研究所の土曜講座の取り組み、またこれまで研究所の情報保障に大きく関わってきた NPO ゆになどの報告をもとに情報の発信・共有をおこなう。また、情報保障を受ける当事者である聴覚障害者、留学生、さらに障害教員の視点を加え、これからの情報保障のありかたについて、参加者とともに検討する。

当日のプログラムは以下のとおりである（報告者所属は開催当時のもの）。なおこの企画には、NPO 法人ゆにによる文字通訳、株式会社ミライロ（ミライロ・コネクト）により手話通訳がついた。

大谷いづみ（立命館大学産業社会学部／生存学研究所）：「開会の挨拶」

橋口昌治（立命館大学生存学研究所）：「コロナ禍における生存学研究所の情報保障について——総括編」

安田智博（立命館大学先端総合学術研究科）：「コロナ禍における生存学研究所の情報保障について——障害学会編」

中井良平（立命館大学先端総合学術研究科）：「コロナ禍における生存学研究所の情報保障について——障害学国際セミナー編」

川端美季（立命館大学生存学研究所）：「土曜講座の情報保障とその課題」

窪崎泰紀（NPO 法人ゆに）：「文字情報保障とは——参加保障のための本質」

甲斐更紗（群馬大学）：「大学や学会などの学術場面における情報保障——聴覚障害当事者が参加できるように」

シン・ジュヒョン（立命館大学先端総合学術研究科）：「目に見えない困難——留学生の立場から」

大谷いづみ（立命館大学産業社会学部／生存学研究所）：「分断ではなく架橋へ——何らかの「困りごと」をもつ学生と何らかの「困りごと」をもつ教員支援の未来」

質疑応答

進行：川端美季

当日は、様々な障害当事者の方を含むおおよそ 50 名の方の参加があり、オンラインでのバリアフリーを実現するためにすべきことなどをめぐって質問があった。そうした応答を通じて参加者それぞれの視点からバリアフリー実現のために何が障壁として立ち塞がっているのが提示され、問題点が共有された。また、オンライン上の運営の複雑さについても、参加者に共感をもって受け止められた。同時に全体の時間配分や報告者の話すスピードなどといった具体的な課題も示された。

本特集は、開会の挨拶は当日の雰囲気を伝えるために講演録とした。留学生の視点を提示したシンの報告も同様である。そのほかの各報告は当日の質疑を踏まえ、当時の発表に加筆し、まとめたものである。

この企画を行うに至った背景のひとつには、2019 年から活動している生存学研究所のアクセシビリティ・プロ

ジェクトがある。

立命館大学生存学研究所アクセシビリティ・プロジェクトは、2019年度同研究所の重点プロジェクトとして発足した。当初は、主に移動アクセシビリティを主題に、現在のアクセシビリティの課題について実態調査や情報共有を行った<sup>1)</sup>。

このプロジェクトには、代表である大谷いづみ（ハンドル形電動車いすユーザー）、坂井めぐみ（電動車いすユーザー）、北島加奈子（手動車いすユーザー）、また視覚障害のある中村雅也や栗川治など、様々な障害種別の当事者、またシン・ジュヒョンなど海外出身の研究員や留学生がメンバーとして多く参加している。目に見えやすい障害があるひともいれば、外側からは見えにくい障害のあるひともいる。留学生などは、新型コロナウイルス流行により日本への出入国が難しくなり、移動と情報アクセスに困難を抱えることも露わになりつつある。

こうした様々な事情を抱えるひとや多様な障害のあるひとが交流すると、それぞれの困難さに直面した経緯や、障害を持つに至った過程や種別が異なっており、それにより移動ツールや生活・居住環境も異なり、情報アクセシビリティなどの必要なサービスや求めるものは変わるということがよくわかる。もちろん、障害種別が異なっても共通するものもある。

多様な当事者をめぐるアクセシビリティの実態や、その課題にどのようなものがあるのか、わかるようで、実のところよく見えるものにはなっていない。当事者が主体的にアクセシビリティの課題に取り組み、実態と改善点を示すことが重要である。また昨今、アクセシビリティについてメディアなどでも注目されるようになり、当事者が直面した困難さを訴える場面も増えている。しかしながら、そういった当事者があげた声は無視されたり、中傷されたりするという事態も生じている。こうした事態の背景にあるのは、当事者が生活のなかで日々ぶつかるアクセシビリティの困難や実態が広く理解されていない、共有されていないということである。

アクセシビリティの課題を抱えているのは特定の当事者のみだと捉えるのは誤りであろう。なぜなら、いつ誰でもその当事者になり直面し得る問題だからだ。たとえば、移動アクセシビリティについては、自分の体調が悪くなったりケガをしていたりすると普段当たり前のように入っていた階段が途端に使用し難い、または使用できないものとして現れる。また、ベビーカーを使うと、これまで気にならなかった段差が急にバリアとして立ち現れる。高齢になれば、問題なく使用していたツールがだ

んだんと使用できなくなっていく。つまり、アクセシビリティの課題を考えることは、当事者の問題解決を志向しながら障害者や高齢者を取り巻く社会制度や社会の在り方を再考することでもある。私たちが暮らしていくうえでよりよいシステムを考えるためには、いまある困難を解きほぐし、不可視化されているものを「見える化」する作業が不可欠なのである。

アクセシビリティ・プロジェクトでは、各メンバーの生活や研究活動における公共交通機関などの移動アクセシビリティやオンライン化がすすむなかでの情報アクセシビリティの情報共有や実態調査をこれまで行ってきた。また、「キャンパスは街の縮図」であるという視点<sup>2)</sup>から、大学キャンパスで移動に困難を抱える様々な当事者の研究活動に必要なユニバーサル・デザインにも焦点をあてて検討してきた。このことは移動アクセシビリティ・情報アクセシビリティともに、大学キャンパスの環境を大学職員とともに再検討する機会につながった。

2019年末から2020年にかけて、移動アクセシビリティについて、大谷いづみや坂井めぐみを中心に、大学職員もWHILL（電動車いす）を利用し朱雀キャンパスの調査を行った。このことは1階大学院入り口のバリアフリー化を推し進めることになった。また、2021年より、情報アクセシビリティについて、立命館大学土曜講座の文字通訳の全面的な導入を土曜講座事務局とともに検討し、2022年度に土曜講座の文字通訳が対面であろうとオンライン開催であろうと実現することになった。これまで当事者が日常的に抱えていた名前もつけられないような細かなバリアがあることが問題点として共有され、そしてその解決策が当事者だけではなく多くの人々にも利便性をもつことが認識され、実現に至った。このプロセスは私たちが暮らす環境のアクセシビリティやユーザビリティをまさに捉えなおさせるものであった。

このように、アクセシビリティ・プロジェクトをすすめるなかで「見える化」の重要性を身に染みて感じてきたことが、本企画を行うに至った直接的なきっかけとなった。

2020年から新型コロナウイルスの世界的パンデミックにより、大学の授業やシンポジウムといった企画はオンラインで行うことを余儀なくされた。生存学研究所ではいち早く、2020年5月にオンラインセミナー「新型コロナウイルス感染症と生存学」を開催した。これは生存学研究所の長瀬修特別招聘教授を中心にZoomを用いた企画で、NPO法人ゆにと株式会社ミライロの協力でオン

ラインでの文字通訳・手話通訳をつけた。完全オンラインの企画は初めてであり手探りの試行ではあったが、多くの方が参加された。さらに、その2ヶ月後の2020年7月には、「土曜講座代替企画ウィズコロナ／アフターコロナのアクセシビリティ」がオンラインで開催された。このとき、本企画の報告者である橋口昌治さん、中井良平さん、安田智博さんを中心に生存学研究所オンライン事務局が発足し、川端美季も側面から関わり運営にあたった。この後2020年度、生存学研究所は、日本、韓国、台湾、中国から成る障害学国際セミナーのオンライン開催をホストとして行い、また障害学会第17回大会に協力することになった。その運営に生存学研究所オンライン事務局が大きく関わるようになった。

2020年はオンライン化が非常に進んだ1年であったが、当然ながら、企画規模や参加者や目的、注意事項が異なるため、生存学研究所オンライン事務局はそのひとつひとつを手探りで進めざるを得なかった。関係部署との打ち合わせやリハーサルを入念に行ったとしても、当日に新たなトラブルが生じるということもある。障害学国際セミナー開催にあたり、オンライン事務局には3か国語にわたる通訳や手話通訳、文字通訳がつつがなく行えるよう整備するといったアクセシビリティの課題もあった。手探りで進められた準備過程やそれで得たノウハウなどは非常に得難いものである。にもかかわらず、いわば舞台裏の実情と内容が表に出ないまま失われていくことについて、生存学研究所に所属する当事者としては危惧を抱かざるを得なかった。

従来のように対面で行われる企画はその現地にいかなければ聴講できないが、オンラインであればその場に来ずとも、また移動の時間を考慮せずとも参加することが可能になる。今後コロナ禍が収束しても、オンライン化の波が収まることはないだろうし、収める必要もないだろう。多様なひとたちがオンライン上（オンラインでなくても）で交流する際、よりスムーズに、また誰かを脅かすことのないようにするために、どのようなことに配慮や注意を行うべきなのか、本特集のどの報告にも多くの示唆が含まれている。今後の情報アクセシビリティを考えるうえで、本特集が大きな手掛かりになることを期待している。

最後に、本特集およびオンライン企画が、当日滞りなく実施できたのは、運営補助にあたった浦野智佳さん、宮内沙也佳さん（ともに立命館大学先端総合学術研究科院生）、アクセシビリティ・プロジェクトメンバー、生存学研究所事務局、生存学研究所オンライン事務局、NPO法

人ゆに、株式会社ミライロ、共催である「Post コロナ社会 提案公募研究プログラム」事務局の皆様のご協力によるものであることを明記しておきたい。改めて、この場を借りてお礼申し上げます。加えて、報告および本特集執筆にご尽力いただいた橋口昌治さん、中井良平さん、安田智博さん、NPO 法人ゆにの窪崎泰紀さん、甲斐更紗さん、シン・ジュヒョンさんに厚く感謝いたします。

#### 注

- 1) アクセシビリティ・プロジェクトの活動やメンバー紹介については、ウェブページ（<https://www.ritsumeai-arsvi.org/project/project-2767/project-2937/>）の記載内容と重複していることを断っておく。
- 2) この視点については、立命館大学副学長であり先端総合学術研究科教授・生存学研究所運営委員である松原洋子先生にご教授いただいた。

